



「地球環境と流体力学」

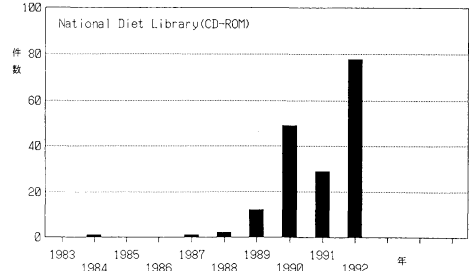
日本流体力学会編

朝倉書店，1992年9月発行，

A5版275ページ，5665円

国立国会図書館の一般閲覧室をはいて右側に、1969年以降同館が受け入れた和図書を検索できる設備があることはご存知の方が多いと思う。(1) 1969年～83年，(2) 84年～91年，(3) 92年～のデータを収録した3種類のCD-ROMから、それぞれの期間での和図書情報が得られる。端末のひとつの前には(2)のROMを選択し、キーワードを「地球環境」として検索すると94件が表示された。それらのやや詳しい情報を見ていくと、「くらし」から「恐竜」まで幅広くスプレッドしているなかで環境庁や農林水産省傘下の研究機関の報告書がまず目につく。これらには温暖化、酸性雨、森林伐採、沙漠化、オゾン層破壊など、人類が直面する環境問題に関する情報が収録されている。また、「地球環境の危機」、「地球環境が危ない」など危機感を前面に出した書物がかなり多い。これらの書物は最近のものが多く、1988年以前は非常に少ない。第1図に(2)および(3)のCD-ROMから検索した各年の件数を示す。1989年以後急速に件数が増えて1992年には78件に達している。この(3)のCD-ROMのNO.46として「地球環境と流体力学」(日本流体力学会編，1992年9月朝倉書店)が収録されている。

この本は1991年7月に東京工業大学百年記念館で行われた日本流体力学会主催の同名のシンポジウムの講演をまとめ、それに手を加えたものである(シンポジウム世話人は東京工業大学工学部日野幹雄教授、東京大学海洋研究所木村龍治助教授、東京工業大学工学部池田駿介教授のお三方)。この本の特徴はいくつかあるが、まず学会編であることで、1984年以降172件のなかで学会編のものは「海と地球環境」(日本海洋学会編，1991)、「地球環境と経済政策」(日本経済政策学会編，1992)と本書の3つしかない。また内容は、実際的な問題から基本概念の紹介、自然科学研究の姿勢、哲学まで非常に多岐に渡っており、一見バラバラの見える。13のトピックスがそれぞれの著者の独自のスタイルで語られており、これらに本書のスタンスについて述べた総論をくわえた合計14の章立てになっている。総論によれば本書の特徴は(1)「地球環境にかかわる最新のトピックスをあつめた」もので、(2)「社会問題の解決に欠かせない要素となっている流体力学」



第1図 国立国会図書館が1984年～1992年に受け入れた和図書のなかで「地球環境」をキーワードとする書物の件数。

を紹介しており、動的自然現象の多くが流体力学の素材となる事を示している。13のテーマの中には環境に関する他のほとんどの書物がそうであるように、地球環境が悪化する事への危惧、環境アセスメント的内容のものも見られるが、ほとんどが地球環境(“問題”ではない)の理解にかかせない流体力学的側面(物理)を見事に描いている。「環境学」とは環境悪化の根元である人間活動がこれほど盛んにならなかつたら存在しないと極言されるほどネガティブな学問ととられがちだが、ここでは総じて「自然現象」を流体力学という道具を使って理解しようという本来の姿勢がうかがわれている。また、読み易く書かれているものが多く「なにやら難しい数学を操る抽象的な学問」という印象の流体力学を読者に身近なものに感じさせようという所期の目的を達している。流体に関連した研究者以外の読者、学部学生も十分読める内容(やや難しいものもあるが)と思われる。とはいえ「最新のトピックス」なので同業者にとっても興味深いものとなっている。

しいて難を言えば、全体のつながりはなく、内容・スタイルともに整合性に乏しいともいえるが、これもこの本の特徴であり、どの章から読んでも適当な長さで完結しているため、気軽に読む事が出来る。なにやら、ほめ言葉だけになってしまったが、ここでは取り上げられなかった魅力的なテーマも多くあると思うのでぜひ続編の刊行を目指してほしいものである。

最後にまだ本書を手にとられていない方々のために目次を紹介すると(数字はページ数)、1. 総論(木村・日野：8)、2. 風環境の特異点・竜巻(新野：14)、3. 3次元レーダーで探る降水現象(中北：26)、4. 大気汚染の長距離輸送(植田：7)、5. チェルノブイリの灰はどう広がったか(吉川：16)、6. 人工衛星から海洋・大気を探る(宮田：13)、7. 海洋が地球環

境に果たす役割 (酒井:13), 8. エル・ニーニョと赤道波 (和方:9), 9. 湖から学ぶ自然循環系 (田中:10), 10. 植物が影響を及ぼす河川環境 (池田:12), 11. 温暖化が変える海岸環境 (磯部:12), 12. ヒートアイランドとクールアイランド (日野:29), 13. 植生による気候緩和効果と都市環境への応用 (日野・神田:15), 14. 地球規模の温暖化と植物 (内嶋:12) で, 各章に文献が紹介されており, 巻末には索引もある。

さて, 検索を終了する前に (1) の CD-ROM を開いたところ 2 件が収録されていた。その内のひとつは国

際自然保護協会による「地球環境の危機」(1981)だが, 他のひとつは故宇田道隆先生著の「海を守る」(1974)で, この書物が国会図書館収録和図書 (1969以後) のなかで, キーワード「地球環境」をもつ最も古い物である事に少し感慨を覚えた。当時の海洋学会大会のナイトセッションで海洋環境問題が盛んに議論され, 現在第一線で活躍中の先生方が当時まだ学生として活発に討論されていたことがつい最近の出来事のように思ひ出された。

(理化学研究所 長島秀樹)



第 4 回大気科学とその大気質への応用

(ASAAQ) 国際会議の御案内

論文募集

Atmospheric Sciences and Application to Air Quality の第 4 回国際会議をウラジオストークで開催予定の所, ロシア国内の事情のため中止になりました。関係者には深くお詫び致します。従って第 4 回会議を次の要領で行なうことになりました。

日時: 1994年5月30日～6月2日

場所: ソウル (韓国)

公用語: 英語

主要議題: 大気質に関する気象学, 海岸域などでの大気汚染物の拡散を支配する気象過程, 局地・地域大気汚染モデル, 大気汚染低減のための計算技法, 局地・地域・地球規模の大気汚染観測, 事故を含む大気汚染の予測, 大気汚染物の物理・化学的変

換, 酸性雨を含めた汚染物の乾性・湿性沈着, CO₂ を含んだ大気中の現象,

トピックス: 地球規模の大気質

連絡先: Prof. Y. S. Chung, Environmental Science Institute, Korea National University of Education, Chongwon, Chongbook 363-791 Korea (Fax ; 82-431-275-1100)

論文提出の手続き

会議に参加し, 論文を発表しようとする人は, その研究の範囲, 結論を英語で200～400字にまとめて, 1994年2月1日迄に Prof. Chung にお送り下さい。なお提出論文はレフェリーを通し, Atmospheric Environment の特別号に掲載予定です。